

◇太田の金山あれこれ

太田のほぼ中央に聳える金山（かなやま）は見上げれば何時もそこに有って、太田人にとっては無くてはならない存在である。標高 236m というから丘みたいなものだろうと思うかもしれないが、「ぐんま百の名山」に指定されている立派な山なのである。そして山頂に立てば、目前に太田市街や足利市街が一望でき、遠くは東京の高層建築やスカイツリー、筑波山、赤城、榛名山等が一望できる。さらに日本一の富士山もチラッと見えるよ。

歴史的にみれば金山は新田山と呼ばれていたように万葉集にも登場する。（にいたやま・金山と呼ばれるようになったのは室町時代とか。）

ところが、金山は単なる山でなく、山全体が中世の山城（金山城跡）で、平成 6 年度より太田市により発掘調査が続けられ、史実に基づき一部石垣などが復元整備されている。このような山城で石垣が多用されているのは珍しいとか聞いたことがある。というのは、山から砕石に向いている金山石が採れたというのも一理あるだろう。第 2 次大戦前、中島飛行機の建設地の埋め立てに金山山系の東山（ひがしやま）八王子山などを切り崩し、その金山石を埋立てに使った。そこで、採石場となった東山は山容が一変して石切山などと呼ばれたそうだ。ところが、急峻で垂直な崖の出現により、当時自殺者が多発したとか、父から聞いたことがあった。

山頂の本丸跡には鎌倉幕府を倒した新田義貞公を祀った新田神社が鎮座。神社裏手には金山城の築城当時の本丸の石垣が残されている。築城は戦国時代の 1469 年（文明元年）で歴代城主は、新田岩松氏、横瀬氏、小田原北条氏の居城で、廃城は 1590 年（天正 18 年）だった。現在の金山城跡は国指定遺跡であり、さらに日本城郭協会により日本 100 名城にも指定されている。

■写真上・金山全景 ■写真中上・金山城虎口 ■写真中中・本丸跡に建つ新田神社 ■写真中下・山頂の日本百名城の碑 ■写真下・本丸裏、築城当時の石垣

大槻伸次



我々が子どもの頃、春や秋の「彼岸の中日」にはきまって「ぼたん餅（秋はおはぎ）」を髭っ皮で包み、風呂敷に包んで腰に巻き付け、近所の友達を誘って登った。

どうして彼岸の中日に金山登山なのかはわからなかったが、物心ついた頃から兄に連れられていった。

また、金山は小学校の遠足コースの定番で、小学校低学年の頃は金山を構成している標高の低い「高山」（たかやま）周辺で、小学校高学年になると金山山頂までというのが一般的な遠足コースだった。（高山山頂には勤王の志士であった高山彦九郎を祀った高山神社があったが、残念ながら最近放火で焼失してしまった。）

現在は、金山山頂への登山道は西山ハイキングコース、東山ハイキングコース、北山ハイキングコースなど幾つも整備されているが、当時は直登に近い 18 曲がりという登山道を登った。そこで 18 曲がりの最後の階段を登りきると大きな石の鳥居が建っていて、そこを潜ると左に茶店、右側にはその茶店の藤棚の休憩所があった。

また、参道の約 150m 先真正面（北）の一段高い所に新田神社が鎮座しているのが見えた。この茶店の裏手を左手（西）に進むと大きな「日の池」と、更に奥に小さな「月の池」があった。この池は城があった当時、生活用水として使用したもので、両池共水が枯れることはない。また、この周辺には城の用材として植えられたという竹や柑橘類が生い茂っているのが見られる。

茶店前から参道を神社方面に直進すると樹齢 800 年を超えると云われている大樺が聳え、更に行くと右側に 2 軒目の茶店があって、茶店を超えると 20 段くらいの金山石を積んだ階段があり、登りきると石の鳥居があり超えると目の前に新田神社が鎮座している。（現在、2 軒在った茶店は無く神社手前左奥に神職の家があるのみ。）

当時の金山は自然が豊かで 18 曲がり登山道の縁を流れる水溜りの石をそっと持ち上げると沢蟹が獲れたが、現在はその姿が全く見られなくなってしまった。

「わたしゃ太田の金山育ちほかに木はない松ばかり」と謡われている様に過去には金山全体がアカマツで覆われ、周辺は心地よい松の香りが漂っていた。また、皇室に献上する「献上松茸」も獲れたが、時代と共に松林の手入れが行き届かなくなったのと松毛虫や松の材線虫の発生などによりアカマツが枯死して激減、現在では全く採れなくなって「献上松茸」は不可能になっている。（10 月、松茸道中は行われている。）

■真上・樹齢 800 年の大樺 ■写真中上・当時の「日の池」写真奥（南）は小公園で藤棚 ■写真中下・改修後の「日の池」（奥は南） ■写真下・改修後の「月の池」



他に松が激減した理由として第2次大戦中飛行機の燃料となる揮発油に困窮し、その代替燃料として「松根油」をとる為、アカマツが乱獲されたというのもある。

昭和30年代後半になると山頂近くまで自動車道が作られ、自家用車で手軽に山頂に行けるようになった。(当時は未だ自家用車はあまり普及していなかったが。)

自動車道が作られた当時、F重工伊勢崎工場で作られた試作バスの試運転にも使われていたようで、麓でおーいと声がけされ、山頂の駐車場迄乗せて貰った事もあった。

また、金山の登り口近くにボート工場(現在、呑龍様北側の駐車場となっている。)とF重工呑龍工場のラビットスクーターのテストコースと、その隣に「東山」の坂を利用した登坂テストをするコースもあって、我々はその様子が見たくて暫らくそこを離れられなかった。

金山は自動車道が造られてから大変行き易くなったが、モータープールから山頂方面に向かっての遊歩道は、今の様に整備されてなく「月の池」周辺は鬱蒼とし、「日の池」周辺は背の高い笹や木々が生い茂り寂しげなところだった。当然、現在「日の池」の南側にある周辺は未整備で小さな公園風のところに藤棚とベンチが置いてあるのみだった。そんな金山を、晩秋の北風が吹く頃一人訪ねると、笹や木々の間を吹き抜ける風の音に戦国時代の兵たちのざわめきを連想していた。ところが、金山山系の標高の低い「高山」や「東山」周辺は太田市街に近かった為、春風温む頃ともなれば薄暮に若いカップル達が盛んに訪れ、デート場と化していたのを目撃している。

現在の金山は高齢化社会となり、定年退職した人たちが賑わいを見せている。私自身も市街に出掛けた時、金山に立ち寄り一歩きしてくるようにしているが、平地の散歩と異なって歩いたという実感が湧いてくる。

余談 金山に水芭蕉の群生地

水芭蕉と云えば、すぐに尾瀬を連想するほど尾瀬と馴染みの深い植物(花)ですが、その水芭蕉の群生地が金山の東山公園親水広場(水道山近く)にあります。見頃は3月下旬で、毎年「太田水芭蕉祭」が開かれます。第4回となる今年は3月26~28日に大正琴や雅楽、歌などによるコンサートが開催されるそうです。



■写真左・群生地を整備するボランティアの人達を紹介する記事。読売新聞 2021/2/13 朝刊の群馬を紹介する頁。整備の発端は、散策中竹藪の中で咲く水芭蕉を発見した事からだそうです。

■写真右・2019/3/27に、私が訪れた時の水芭蕉群生地の様子。

ああ懐かしの歌声♪「金山慕情」

昭和 30 年代、生家では農協の「有線放送電話」に加入した。この有線放送電話は、放送と電話を兼ね備えたもので、放送は農協からのお知らせや音楽が流れ、電話機能としては、複数軒で一回線を有する共電式の電話（秘話機能付き）だった。

この有線放送電話から毎朝、目覚まし時計代わりに流れてきたのが金山を詠った♪「金山慕情」だったのである。この、金山慕情は昭和 37 年頃作られたもので、山崎 正作詞、林 伊佐緒作曲で、大津美子が歌った。毎日毎日流れてきたので自然と歌詞とメロディーを覚えて、今でも忘れられない一曲となっている。



金山慕情 太田市選定 キングレコード

1. 君とのぼりし 金山を
ひとりたずねる 身は悲し
ああ初恋の 遠き日に
思いは 続く
この道よ
2. 松のみどりも 城跡の
池の水さえ 変わらぬに
あああの人の 面影は
瞼の裏に
描くばかり
3. 山の松風 日ぐれ風
音もせつなく 身に沁みる
ああ夢淡き 金山に
思い出 埋めて
かえろうか

■写真・ドーナツ版レコードの B 面が金山慕情。

山風にのって歌が聞こえる

以前この欄で紹介した、私の伯父である大槻三好と妻松枝は共に 1900 年代初頭に群馬県太田市内に生まれ育ち、1920 年代から活動を始めた歌人夫婦である。共に口語短歌（自由律短歌）を詠み、夫である三好の絵画は秀逸だった。夫婦共に最初の教員赴任地が、金山山麓にある小学校であったこともあり金山を愛し、金山を題材にした歌や絵画が多くみられる。下記は大槻三好歌集「白墨の粉」、松枝の「紅椿」より抜粋。



松山 (金山) 昭和3年 東京[紅玉堂]版 歌集「白墨の粉」より抜粋

日曜を松山へ来たが
どこを描くあてあるでなし
煙草くゆらす



野いばらが
おおこなにも咲いている
朝霧の丘へ三脚すえる

ひつじ草ちょぼちょぼ咲いている
山合の用水地に
ないてる蛙



幾日も此の処へ画架を立てたので
煙草の吸ひがらが
白く目に立つ

寝ころんでずっと見ている
草の葉のそよぎに
何か話しかけたい

幾日を此の処で描いたろ
幾人かの村の子供の
名前を覚えて



ようやくに
書き上がった嬉しさだ
夕日の丘に帽子を振った

書く事の此の喜びを
ひとり抱き
秋晴れの日の松山に行く

草にねて煙草輪に吹く
どこからか鋸の音が
きこえる丘です

ようやく見つけた泉だ 岩陰だ
葉っぱの茶碗だ
甘露だ 甘露だ

描いてれば
兵隊遊びする子等のラッパが
澄んで鳴りひびく丘

金泥で書いたような浅間山
夕陽くるめく
麦田 そよ風

スケッチ箱を枕にしてねる
松の丘
此の退屈は絵にもなるまい

今年の秋もあの丘を描こう
俸給にしばられて居れば
旅にもいけず

ゆるやかなスロープを
トロッコが走る走る走る
あの田圃へ血清注射だ

松山の一本細道
露の道
手を離さねば歩けない道



大槻松枝歌集「紅椿」から

松 松 松

一本一本光と影をもって
すくすく空へのびている

寝ころんでずっと見ている
草の葉のそよぎに
何か話しかけたい

教室から
大自然の美へ飛び出した
児等の魂がかけめぐる丘

一年生のバラバラの歩調よ
あの中に神がいるのだ
おどっているのだ

此の花の名を知っていて？
野の草に
話の糸口を見つけた君だ

日曜を一人でひっそりあの山に
君は描いているか
なつかしく見る



■写真 5 頁上・歌集「白墨の粉」昭和 3 年 紅玉堂書店 東京日本橋区

■写真 5 頁中上・金山全景油絵 (S26 年／大槻三好画／我が家所蔵)

■写真 5 頁中下・石切山油絵 (戦前熊野方面から・旧太田市民会館展示／大槻三好画)

■写真 5 頁下・昭和 28 年、私が小学校 6 年生時、友人と石切山ハイキングへ。写真向かって右下足元は急峻な崖となっている。周辺に赤松が見えないのは戦中の乱伐影響か。

■写真 6 頁・大槻三好歌碑 現太田市中央図書館敷地 (旧県立太田学習文化センター)

■写真 7 頁・惣田紗希著「山風にのって歌が聞こえる 大槻三好と松枝のこと」発行元・タバブックス (2019 年 10 月発行)。

※自由律短歌は五七五七七の形式にとられない短歌 (口語短歌)。

(2021/3/20 記)